

自らの体験や感じたことから  
 県福祉作文コンクール表彰式開催報告

1月18日に 第37回 神奈川県福祉作文コンクール（共催：県共同募金会、後援：県、市町村教育委員会、NHK横浜放送局、神奈川新聞社、テレビ神奈川、日揮社会福祉財団）の表彰式を県社会福祉会館で開催しました。

この福祉作文コンクールは、子どもたちに「ともに生きる福祉社会」について考え、学校での生活や日々の暮らしの中で、「おもいやり」や「たすけあい」の心を育んでほしいと毎年開催しているもので、本年は県内の小中学生合わせて、254校から9396編の応募があり、地区審査から県一次審査、県最終審査会で選考され、優秀賞16編、準優秀賞20編、佳



本会会長賞(小学生の部)の浅野さん(上)、本会会長賞(中学生の部)新井佑里恵さん(厚木市立荻野中学校2年生)



県知事賞を受賞し、朗読する折谷穂音子さん(右：横浜市立都筑小学校1年生)と渡部将弘さん(左：秦野市立鶴巻中学校3年生)

(地域福祉推進担当)

作20編、合計56作品が表彰されました。審査委員長の嶋田充郎さん(テレビ神奈川)からは「高齢者や障害者とのかわり、福祉制度のあり方で、幅広いテーマで作文が応募されていることに驚きを感じます。将来を背負っていく世代が、福祉について考え、文章にする過程を経験することは大変重要なこと。今回の作文に向き合ったように、これからも常に相手の気持ちを考えることができれば、日本、そして世界の将来は明るく開かれていきます」と講評をいただきました。本紙では全応募作品を代表して、本会会長賞(小学生の部)を受賞した、大磯町立大磯小学校5年・浅野遙さんの作文を紹介します。

優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

かわいそうじゃないよ

大磯町立大磯小学校 5年 浅野 遥

私には、弟がいます。弟の名前は陽介で、ダウン症です。ダウン症とは、ダウンという名前の眼科のお医者さんがみつけたのであって、決して能力が低下するわけではありません。陽介は、他の子より体がやわらかかったり、なかなかうまくしゃべれなかったりするけれど、とてもかわいくて、人なつっこくて、とても優しいです。この前も、私がお母さんにしかられてへこんでいたら、陽介が、「だいどーぶ？」と言って、自分は悪くないのに、「ごめんね」と言ってくれました。だけど、お母さんにしかられても、私がへこんでいなかったら、陽介も一緒になって「だめでしょ」としかってきます。このように、陽介には、良い所も悪い所もあります。でも、それは障がない人でも同じです。

でも、陽介のことがダウン症のことを全く知らない人が陽介を見たら、どう思うでしょうか。きっと、ずいぶん小さいなあとか、どうしてちゃんとしてやべれないんだろうとか思うのではないのでしょうか。そして、陽介がダウン症だと知ったとき、かわいそうだと思うのではないのでしょうか。けれど、陽介や他の障がいのある子は、決して自分で自分のことをかわいそうとは思いません。私たちが、自分の短所を考えた時に自分がかわいそうだと思うのと同じです。だから、みんなに障がいがあることをかわいそうだと思うほしくないのです。

それよりも、障がいのある子が何かができなかった時に、障がいがあるからといって、すべて代わりにしてあげるのはではなくて、その子自身の力でできるようにできるように手助けしてほしいと思います。なぜなら、障がいがあっても、がんばればできるようにすることはとても多いからです。そして、障がいのある子が、何かできるようにになると、その子にとってはとても喜ぶので、それを見てみると自分も嬉しくなります。その子ができるように手伝ってあげれば、なおさらです。私も、陽介が何か新しいことができるようになるように手伝っています。例えば、ズボンの前後を確認してはくように教えています。障がいがあるといっても、違いは少ししかありません。だから、みんなと一緒に遊んだり、少し手伝ったりして仲良くなっていきたいです。そうしたら、もっと楽しくなると思います。